

病理診断科

【診療科の特色】

- ・ 基本的には病理診断学の修得を主目的とするが、その範囲としては生検・手術材料の病理組織診断のみならず、病理解剖や迅速診断さらには細胞診なども学習することが可能である（婦人科や呼吸器などの臨床科でも細胞診指導医の取得が望まれる場合もある）。また、CPCを通して1症例を総合的に学ぶことができる。
- ・ 中央診療部のひとつである病理診断科はほぼ全臨床科に関する病理学的事項を研修することが可能である。すなわち、研修後の進路が決定している場合にはその科の症例を中心に学ぶことが可能であり、また、1年目に担当した症例を再検討することも可能である。
- ・ また、長期間の研修を希望する者に対しては臨床病理学的な検討を中心とした研究を経験することも可能である。

【研修の受け入れ可能期間】

1－6 か月

【研修の人数】

原則 1 期間 1 名

【研修の到達目標およびスケジュール】

（一般目標）

- ・ 生検・手術材料・病理解剖材料および細胞診検体の取り扱い、診断業務を通じて病理業務の流れを理解する
- ・ 各症例の診断・治療における病理の役割・意義・重要性を理解する
- ・ 病理診断科と臨床各科との連携の重要性を理解する

（行動目標）

A) 生検・手術材料の病理診断

- ・ 生検・手術材料の切り出しから標本作製に至る過程を理解する
- ・ 肉眼所見の記載・切り出しができる（肉眼写真の撮り方の修得）
- ・ 病理組織標本の観察・診断・報告書の作成（顕微鏡の使い方および病理組織写真の撮り方の修得）の基本を学ぶ

B) 迅速診断

- ・ 迅速診断の標本作製過程を理解する
- ・ 迅速診断の意義、適応および診断の限界を理解する

C) 病理解剖

- ・ 病理解剖の意義を理解する
- ・ 解剖の手技を理解する
- ・ 剖検材料の観察・診断の基本を学ぶ

D) その他

- ・ 細胞診標本の観察の基本を学ぶ
- ・ CPC へ参加する。症例の提示、準備を通じて臨床と病理の連携の重要性を理解する
- ・ 余力があれば、病理学的な手法を用いた臨床的・基礎的な研究を行い、学会への参加・発表を行う

(期間別到達目標および研修スケジュール)

A) 期間に関わらず行うこと

- ・ 切り出しへの参加（毎日）（肉眼所見の習得目的）
- ・ 細胞診検閲への参加
- ・ 迅速診断への参加・見学
- ・ 病理解剖への参加・見学（迅速診断・病理解剖がある場合にはそれを優先）

B) 1～2 か月間

- ・ 第1週目：これまでの研修で担当した症例の病理標本の抽出
- ・ 第2週目以降：抽出した標本の観察を通して、顕微鏡の見方、所見の取りかたを学ぶ余力があれば興味症例を抽出し観察する

C) 3～9 か月間

- ・ 第1週目：これまでの研修で担当した症例の病理標本の抽出
- ・ 第2～1 か月目：抽出した標本の観察
- ・ 第2 か月目以降：興味症例の抽出し観察する
- ・ 研修終了時よりも3か月以上前の病理解剖において、解剖への参加とともに報告書作成まで担当し、主治医との相談のうえ、可能であれば CPC で報告する

D) 10～11 ヶ月間

- ・ 第1週目：これまでの研修で担当した症例の病理標本の抽出
- ・ 第2～1 か月目：抽出した標本の観察
- ・ 第2 か月目以降：興味症例の抽出し観察する（希望があればそれらに対して臨床病理学的な検討を行いまとめる。病理学会・研究会への発表・参加も可能である）
- ・ 研修終了時よりも3か月以上前の病理解剖において解剖への参加とともに報告書作成を担当し、主治医との相談のうえ、可能であれば CPC で報告する

(週間スケジュール)

AM10：30－11：30 手術・生検材料の切り出し（月－金）

PM14：00－15：00 病理標本観察指導（月・火・木・金）

それ以外の時間を各自、検鏡を行う

迅速および病理解剖がある場合はそれを優先する

剖検材料の切り出しは手術・生検材料の切り出し後に行う

【その他】

- ・ 病理医になることを目的とする研修医だけでなく、他の臨床科を目指す場合にも病理学的な知識は重要である。その進路にあわせた研修を考慮しているので、進路に向けた研修を充実させる意味でも臨床病理を選択することは有意義と思われる。
- ・ 病理医として臨床に携わるためには認定病理専門医の取得が必要となります。他の臨床と異なり、研修修了後すぐに病理医としての就職はできません（専門医取得までには最低でも4年かかります）。学会などへの入会とともに大学院などに修学する必要が出てきます。その際、千葉大学を中心とした教室を紹介することになります。

